

見せるとまた喜ぶので、さらにもう一枚描いた。そんなことを続けているうちに、サキの絵を描くのが行雄の目課のようになった。

東京へ来てからふた月が過ぎようとしていたが、行雄は相変わらずビルの窓ガラス拭きのアルバイトをしていた。仕事は毎日ではなかったが、危険手当の付くそのバイトは思っていたよりもいい収入にはなった。だから食い詰めることこそなかったけれど、行雄は時折り、深い穴にはまったような絶望感をおほえるようになっていた。

自分はいったい、ここで何をしているのか――。

いつかそのうち自分は何かをやるのだ、とは始終考えていたが、いま現在の自分が何をしているのかと自問するのは行雄にとってはじめての経験だったのかも知れない。あてもなく飛び出してきた東京で、アルバイト以外は何もしていない行雄に、そうそう簡単に親しい友人ができるわけもなかった。孤独もまた、行雄がはじめて経験する種類のものだった。

はじめのうちこそ、行雄はサキに対する同情だけで部屋に上がることを許していた。だがそんなサキの存在が、だんだんに行雄の生活にとって失いがたいものになりはじめていた。

子ども嫌いであつたはずの自分がサキだけは一緒にいても気にならないのは、サキが今まで見たこともないほどおとなしい子であるからだろうと思っていた。事実サキはいるか

いないか判らないくらいに静かな子どもだったし、クレパスさえ与えておけば特に構ってやらなくても何の不平も言わなかった。うるさくまとわりついてくるようなことも一度もない。

だがやがて行雄は、自分がサキと毎日のように一緒に過ごせるのは、自分自身が孤独だからだということにやつと気付いた。

気付いたことはもうひとつある。

行雄の描いたサキの絵はスケッチブック一冊分をとうに超えていた。中には途中で止めてしまった失敗作も結構たくさんあるのだが、どんな失敗作も破り取らないでそのままにしてある。誰に見られるわけではなくても失敗作は失敗作だからと、一度行雄がそれを破り捨てたときに、サキがひどく憎しそうな、残念そうな顔をしたのだ。

それ以来、行雄は自分が描いている途中で失敗作だと感じたものでもとにかくサキに見せることにした。それでもサキは嬉し^{うれ}しそうにした。これだけ何枚も描き続けていればサキのはうでもいい加減「描かれる」ということに慣れて、そろそろ飽きてきてもおかしくないのに、どうやらサキはよほど自分を描いてもらうのが好きであるらしい。

それはきっと、そういう種類の興味を自分に対して向けられたことが今までになかったせいなのだろうと、なんとなく行雄は考えた。絵でなくてもいい。小学校の運動会などで本人よりも大はしゃぎしながらビデオに我が子の姿を収めている親の姿はよく見かけるし、